様　式　Ｚ－７

平成２７年度科学研究費助成事業　実績報告書（研究実績報告書）

1．機関番号　3 2 6 0 4

2．研究機関名　大妻女子大学

3．研究種目名　基盤研究(B)（海外学術調査）

4．研究期間　平成２６年度～平成３０年度

5．課題番号　2 6 3 0 1 0 3 3

6．研究課題名　日系国際児のバイリテラシー形成過程の質的探究とその展開

7．研究代表者

研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名
4 0 3 5 0 5 6 6	シバヤマ　マコト 柴山　真琴	家政学部	教授

8．研究分担者

研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名
0 0 1 8 8 0 3 8	タカハシ　ノボル 高橋　登	大阪教育大学・教育学部	教授
8 0 4 0 9 7 2 1	イケガミ　マキコ 池上　摩希子	早稲田大学・日本語教育研究科	教授

9．研究実績の概要

本研究の目的は、ドイツ居住の独日国際家族を対象に、幼児期･児童期のバイリテラシー形成過程の更なる解明を進めることである。具体的な課題は、以下の通り。
【課題1】家族の多様性に通底するバイリテラシー実践の基本原理の抽出：母親のドイツ語力が低い場合のバイリテラシー実践やバイリテラシー形成の道筋を明らかにし、さらに第Ｉ期研究の対象家族(母親のドイツ語力が高い家族)との比較検討を通して、母親の条件を超えた家族間協働の多様性に通底する基本原理を取り出す。／【課題2】継承語としての日本語リテラシー形成過程の特徴の解明：参照すべき言語能力の指標の整備を行うことにより、独日国際児の作文力の発達過程がモノリンガル児とどう異なるのかを解明する。
上記課題を明らかにするために、2年目である平成27年度は、(A)と(B)の研究調査を行った。
(A)【課題1】に関わる調査研究：[調査1]日誌法による対象児の行動観察調査、[調査2]対象児の通学校(現地校と日本語補習授業校)等でのフィールド調査、[調査3]対象児の二言語力(ドイツ語力と日本語力)調査(会話力、作文力、語彙･文法･読解力の測定)の2年次調査を行った。各調査で得られたデータについては、調査ごとに年度末までに大方のデータの整理を行った。
(B)【課題2】に関わる調査研究：前年度の作業を踏まえて、本年度は2つの作業を行った。(1)日本語母語児の作文力の指標(作文評価法)の精緻化：平成26年度に開発した｢作文評価法｣のうち、｢談話レベル｣の評価指標となる｢ルーブリック｣の小4児用の改訂を行った。(2)国際児の日本語作文データの収集と分析：平成26年度に実施した補習校小4児(ほとんどが国際児)の日本語作文の分析結果を報告書としてまとめ、口頭説明を加えながら補習校側にフィードバックした。また、同補習校小6児を対象に、小4児と同様の日本語作文調査も実施した。

10．キーワード

(1) バイリテラシー　(2) 独日国際児　(3) 同時バイリンガル　(4) 質的研究
(5) 継承語としての日本語　(6)　(7)　(8)

（注）・印刷に当たっては、Ａ４判（縦長）・両面印刷すること。

11. 現在までの進捗状況

（区分）（2）おおむね順調に進展している。

（理由）

9に記した2つの調査研究に対応させると以下の通りである。
(A)【課題1】に関わる調査研究：当初の計画通り、[調査1]から[調査3]までの3つの調査の2年次調査を行い、調査ごとに、データの整理をほぼ終えることができた。
(B)【課題2】に関わる調査研究：(1)日本語母語児の作文力の指標(作文評価法)の精緻化、(2)国際児の日本語作文データの収集と分析、を課題として設定した。(1)については、「談話レベル」の分析指標である「ルーブリック」の改訂作業を進め、小4児用のルーブリックの改訂を終えることができた。(2)については、当初の計画通り、1年次に実施した補習校小4児の作文データを上述の「作文評価法」を用いて分析する一方で、口頭説明と報告書の提出により、補習校にも分析結果をフィードバックすることができた。さらに、「作文評価法」を開発する際に基準にした母語児の学年(小2・小4・小6)を鑑みて、新規に補習校小6児の作文データ(「物語文」課題作文と「説明文」課題作文)も収集することができた。

以上の理由から、「おおむね順調に進展している」と自己評価した。

12. 今後の研究の推進方策　等

（今後の推進方策）

次年度に向けて、以下のように調査研究を推進していきたいと考えている。
(A)【課題1】に関わる調査研究：[調査1]から[調査3]までの3つの調査の3年次調査を行うことにより、子どものバイリテラシー形成に向けた対象家族の実践過程に関わるデータを系統的かつ多層的に蓄積していく。
(B)【課題2】に関わる調査研究：児童期の「作文評価法」(平成26年度に開発)における3つのレベルのうち、1)「文字・表記・単語レベル」、2)「構文レベル」については、ほぼ完成している状態で、3)「談話レベル」については、小4児用の改訂が終わっているが、小6児用と小2児用の改訂が継続中である。次年度は、小6児用→小2児用の順番で、両方のルーブリックの改訂作業を終える予定である。
また、補習校通学児(ほとんどが国際児)の日本語作文の分析については、本年度に収集した小6児の作文の分析を行い、昨年度と同様に、分析結果を報告書としてまとめ、補習校側にフィードバックする予定である。作文データの分析においては、上述の「作文評価法」を用いるが、「談話レベル」については改訂後のルーブリックを使う予定である。
なお、本年度の補習校小6クラスが小規模であったため、収集できた作文データ数が少ないことから、補習校と調整の上、小6児作文データの積み増しが可能であればデータを拡充していきたい。

（次年度使用額が生じた理由と使用計画）

（理由）

研究分担者の海外調査のための海外旅費として37万円を用意したが、年度当初には予想されなかった長期入院により、海外調査に参加することができなかったため。また、調査で収集したドイツ語資料の翻訳を依頼する際に相見積もりをとったところ、リーズナブルな金額で業務を引き受ける業者を見つけることができたことから、約24万円を節約することができたため。

（使用計画）

海外旅費(37万円)は、次年度(平成28年度)に実施予定の海外調査の旅費として、使用する予定である。また、翻訳謝金の残金(約24万円)については、次年度(平成28年度)に予定している海外調査で収集したドイツ語資料の翻訳謝金ないしは調査データの分析や保管で必要となる物品費として使用する予定である。

（課題番号： 26301033 ）

13.研究発表（平成27年度の研究成果）

〔雑誌論文〕 計（1）件／うち査読付論文 計（1）件／うち国際共著論文 計（0）件／うちオープンアクセス 計（0）件

著者名	論文標題 【掲載確定】
柴山真琴：ビアルケ(當山)千咲・高橋登・池上摩希子	「子どもの言語習得とグローバル化時代のインターフェース：海外居住の国際家族におけるバイリテラシー実践を手がかりに」

雑誌名	査読の有無	巻	発行年	最初と最後の頁	国際共著
発達心理学研究	有	第27巻第4号	2016	未確定	－

掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）
なし

オープンアクセス
オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難

〔学会発表〕 計（1）件／うち招待講演 計（0）件／うち国際学会 計（0）件

発表者名	発表標題
柴山真琴	国際児の二言語での萌芽的読み書き行動と保育支援

学会等名	発表年月日	発表場所
日本発達心理学会第27回大会	2016年05月01日	北海道大学(札幌市)

〔図書〕 計（2）件

著者名	出版社
柴山真琴(訳)	新曜社

書名	発行年	総ページ数
『質的研究のためのエスノグラフィーと観察』(M.アングロシーノ著)	2016	150

（課題番号： 26301033 ）

（注）・印刷に当たっては、Ａ４判（縦長）・両面印刷すること。

著 者 名	出 版 社
柴山真琴	明石書店

書　名　【発行確定】	発行年	総ページ数
『異文化間教育のフロンティア』(佐藤郡衛他編)(第2章2節「エスノグラフィ」を分担執筆)	2016	227

14.研究成果による産業財産権の出願･取得状況

〔出願〕 計(0)件

産業財産権の名称	発明者	権利者	産業財産権の種類、番号	出願年月日	国内･外国の別

〔取得〕 計(0)件

産業財産権の名称	発明者	権利者	産業財産権の種類、番号	取得年月日 出願年月日	国内･外国の別

15.科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計(0)件

国際研究集会名	開催年月日	開催場所

16.本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

(1)国際共同研究: ー

17.備考

大妻女子大学研究助成情報／採択課題･実績報告書等
http://www.gakuin.otsuma.ac.jp/jyosei/modules/saitaku/

（課題番号： 26301033 ）
（注）・印刷に当たっては、Ａ４判（縦長）・両面印刷すること。